論文内容要旨

論文題名：矯正治療の段階別における歯科衛生士の予防歯科への関わり

専攻領域名：口腔保健学領域

氏名：神田　夏美

内容要旨

矯正治療中は、矯正装置が歯面に長期間装着されることで口腔内の不潔域が増え、う蝕や歯肉炎の発症リスクが高まる。そのため、患者の口腔清掃実行度と口腔衛生管理のモチベーションに配慮しながら専門的な口腔管理が不可欠である。現在米国において、2002 年に Dr. John Featherstone らによって提唱された CAMBRA（Caries Management By Risk Assessment）が広く普及している。CAMBRA とは疫学調査をもとにしたう蝕管理方法であり、患者自身の現在の口腔内環境についてその場で視覚的・簡潔的に評価できる。しかしながら、矯正装置装着中の患者に限局して CAMBRA を行っている報告はない。そこで本研究は、矯正装置装着中の患者に対して、CAMBRA のリスク項目の評価を検討するうえで重要となる口腔清掃度（口腔内細菌数）に着目し、どのような因子がリスクを与えるかを検討することを目的とした。対象者は、2016 年 4 月から 2017 年 12 月の 1 年 8 か月の間に当院矯正歯科を受診し、歯科衛生士の専門的クリーニング（矯正コース）および口腔衛生指導を受けた、マルチブラケット矯正装置（全顎）装着中の患者 55 名である。対象者の初診日、診断名、矯正装置の種類、年齢、性別、口腔内細菌数（レベル）を調査項目とした。データ分析は、相関分析（Kendall の τ および Spearman の ρ の算出）と一元配置分散分析を行った。

結果より、歯科衛生士による介入回数と口腔内細菌数（レベル）の改善度との間に相関関係は認められなかった。また、口腔内細菌数（レベル）が改善した群、変化がなかった群、悪化した群の間で、歯科衛生士による介入回数の平均値に差があるか否かを、一元配置分散分析によって検討をしたところ、各群間で介入回数の平均値に有意差は認められなかった。しかしながら、介入回数が多いほど改善度が高まる傾向にあることが示された。

介入回数が高いほど改善度が高まる傾向が見られたことから、回数を重ねることで、患者の技術力が向上する事はもちろんのこと、口腔管理への意識が高まることが推察される。このことから、口腔内環境を良好に保つためには、患者自身の口腔管理に対する意識づけができた上で日々の口腔清掃を行うことが効果向上に繋がると考える。よって、視覚的・

簡潔的にう蝕バランスを評価できるCAMBRAは、患者の理解度を高め、モチベーションを向上させるために効果的であると考察される。今後は矯正装置装着前と矯正装置除去後、さらに、叢生の程度、抜歯・非抜歯の有無等も調査項目に含め、サンプル数を増やして調査したいと考える。様々な因子との関連を調査することで、矯正治療の一連の流れに対し、歯科衛生士がどのように介入していくべきかを検討していきたい。

（1068字/1200字）